

全学共通科目（後期）「ジェンダー論」開講

落合 恵美子教授の全学共通科目「ジェンダー論」が開講しました。現代日本のジェンダーを広い視野に位置付けて理解し、問題解決の方法について自ら考える力の獲得を目指します。適宜ゲストスピーカーを招き、様々な観点からジェンダー問題の状況や課題、将来の見通しなどについて講義いただきます。



平成 30 年度 10 月開催 全学共通科目（後期）
「ジェンダー論」 講師・テーマ一覧

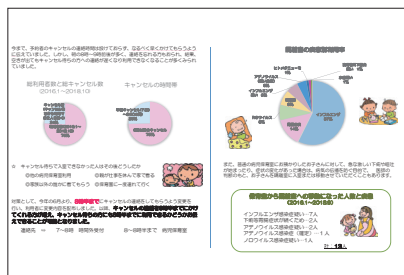
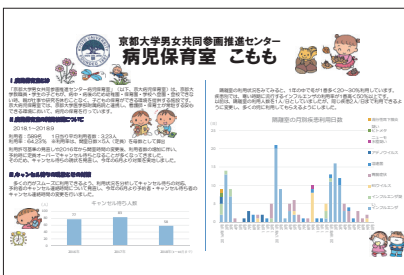
講義日	テ マ
10月 1日	導入
10月 15日	女性は昔から主婦だったか
10月 22日	近代家族の成立と変容
10月 29日	世界の中の現代日本家族 変化したことしないこと
11月 5日	現代日本の子育てはなぜ難しいのか
11月 12日	伝統を問い直す 二つのアジア
11月 19日	ジェンダー平等と父親の育児休業
11月 28日	文学とジェンダー
12月 3日	LGBT と SOGI
12月 10日	男性性と暴力
12月 17日	ジェンダーやセクシュアリティにまつわる悩み
1月 7日	男性のワーク・ライフ・バランス
1月 15日	歴史とジェンダー
1月 21日	まとめ

ゼミの時間：月曜日 3限（13時00分～14時30分）
ゼミの場所：吉田南構内 国際高等教育棟 31

附属病院 オープンホスピタル

11月10日（土）10時から16時まで医学部附属病院外来棟アトリウムホールでオープンホスピタル（病院見学会）が開催されることになり、そこに病児保育室「こもも」がポスター参加することになりました。議題は「キャンセル待ちの現状とその対策」「隔離室とは～隔離室の利用状況と隔離室での1日の過ごし方～」です。

病児保育室でのキャンセル待ちの現状やその対策について詳しく紹介していますので、是非お越しの際はお立ち寄り下さい。



総合人間学部 人間・環境学研究科講演会「豊かな男女共同参画に向けて」

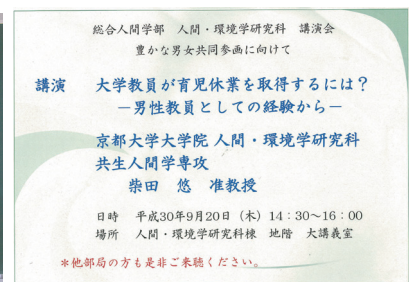
9月20日(木)14:30から人間・環境学研究棟地階大講義室において、大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻柴田 悠准教授により「大学教員が育児休業を取得するには?—男性教員としての経験から—」と題して講演がありました。

柴田准教授から、「育児休業を取得してよかった」というコメントで始まり、大学男性教員の取得率の低さ、制度の概要、取得方法などご自分や周りの方のご苦労があったことを話され、育児休業取得のためには周りの方々の理解がいかに助けになったかを講演されました。

講演後は、参加者から全共科目に関してや部分休業に関してなど多くの質問があり、関心の高さがうかがえました。

最後に研究科長からは、「人間・環境学研究科の男性教員育休取得者の最初の一人として開拓していただき有難う」とコメントをいただきました。終了後、柴田先生の奥様がいらしゃったのでお聞きしたところ「育休を

取得してもらってありがたかった」とコメントされました。



参考：http://www.kyoto_u.ac.jp/ja/about/gender_equality/07.html

2018年度日経ウーマノミクスフォーラム「ダイバーシティ研究環境整備と女性研究者の未来」

8月31日(金)大阪府立国際会議場において、2018年度日経ウーマノミクスフォーラム「ダイバーシティ研究環境整備と女性研究者の未来」が開催されました。京都大学も協力大学として参加しました。大学法人にとどまらず私学、一般企業、大阪府、関西経済連合会など多くの協賛企業や後援団体が参加して、女性研究者がキャリアステージごとに抱える悩みや壁、それらの課題の乗り越え方などを議論し、参加者に対し気づきや不安解消法の共有を図りました。

メインホールでは、基調講演に始まり、3つのパネルディスカッションの中のIII「教えて理系のキャリアパス」に大学院理学研究科の浅井 歩准教授が参加し意見交換しました。また、ミニセミナーには、理学研究科宇宙物理学教室の学生町田 亜希さんが参加し、「宇宙天気がなんだろう?」と題して、多くの女子高生などにアピール

しました。当日は、団体受付を行った女子校もいくつかあり、一般の方を含めて500名の参加がありました。本学も質疑応答や資料等を配布し、本学受験に強くアピールしました。



男女共同参画推進センターでは、下記のような教員の応援を行っております。このような取り組みがありましたら、ぜひ男女共同参画推進センターまでお知らせ下さい。

北関東女子高校生受け入れ

7月25日（水）から27日（金）にかけて大学院理学研究科では、数学・物理、化学・地学グループの二手に分かれて埼玉県立熊谷女子高、茨城県立水戸第二高、埼玉県立川越女子高、群馬県立前橋女子高の4校13名が理学研究科を訪問しました。花山天文台では、大学院理学研究科浅井 歩准教授から講義を受けたのち、天文台内部を見学しました。女子高生たちには、現場でしか味わえない驚きと感動を味わってもらいました。



盛夏の薬学生研修会

8月3日（金）13時から左京区にある武田薬品工業株式会社京都薬用植物園において、薬学生の研修会が開催されました。大学院薬学研究科の伊藤 美千穂講師が講演され、ニッケイ（桂皮の基原植物）の皮むき体験、

精油定量、園内見学と研修、Cinnamomum 属植物の成分をTLCで見る試験など多くの研修を行いました。暑い中、参加者からは、この研修は他にはない実体験があり参加して本当によかったとコメントがありました。



四天王寺中学校訪問

医学部人間健康科学科は、毎年多くの中高生の訪問を受け入れています。8月20日には、私立四天王寺中学校（女子校）より中3の生徒さんと教員の方あわせて約100名が本学科を訪問されました。同校は医療系志望者が多い学校で、キャリア支援の一環として3年前から本学医学部を訪問されています。医学部、薬学部のOGに引率されて11のグループに分かれて研究室を訪問し、最先端の研究を見学しました。その後、本学科で医療技術を体験し、最後のOG講演会では、進路や勉強について悩んだ体験や大学生活など幅広く聞いてもらい

ました。今後も、女子中高生の皆さんが多様な職業について知る機会を持つために、私たちが協力していこうと思います。



連載：研究者になる！－第67回－

東南アジア地域研究研究所
社会共生研究部門・准教授 帯谷 知可

●研究者につづく道でもあったシルクロード

幼い頃の自分が、大人になって研究者になっていると知ったら、きっと驚くでしょう。なにしろ小学生時代は水泳やマーチングバンド、ポートボールなどのクラブ活動をして、常に動きまわっている子どもだったので。中高生の時もテニスに打ち込んでいたので、研究の道に進むとは思っていませんでした。ただ、小学校低学年から英語教室に通いはじめたことがきっかけで外国語に興味があわき、通訳など海外と関わる仕事に就きたいと思っていました。

多感な高校時代、井上靖の西域小説などをよく読み、シルクロードに憧れました。初めてNHK特集のカメラが敦煌などの遺跡に入った時期とも重なりました。そして外国語大学に進学し、ロシア語を専攻。最初はスペイン語を選択するつもりでしたが、実はやむなくロシア語になってしまったのです。今の専門からするとこの選択が重要な分かれ道でした。

ロシア語を専攻する学生のなかには、ロシア文学を愛読している人や社会主義思想に興味をもっている人もいました。私はほとんど事前の知識なく勉強を始めましたが、ロシア語の美しい響きに惹かれました。そんな時に授業でプラトーフの小説『粘土砂漠』が取り上げられ、ソ連の中の中央アジアに関心をもちました。ロシア革命後に中央アジアで起こった反ソヴィエト運動「バスマチ運動」を卒論のテーマにしました。

●ソ連解体後の激動の時代にキャリアも動きだす

もっと深く中央アジアのことを学びたいと思い、1年間の研究生時代を経て大学院へ。この時期にイスラーム世界からの視点で中央アジアを考えるアプローチや、中央アジアの言語で書かれた史料を使った近現代史研究といった新しい動きがでてきたことに刺激を受け、本格的に中央アジア近現代史研究を志すことになりました。ソ連解体という激動の時代を目の当たりにしたことも大きな影響を受けました。ソ連解体後、ロシア以外の旧ソ連地域に関心が集まり、まだキャリアもないのに事典項目執筆などの仕事をさせていただくようになり、その後ウズベキスタンに日本大使館ができると、専門調査員として勤務することになりました。当初は政治経済情勢分析の辞令をもらいましたが、当時の大使から文化広報担当に任命され、試行錯誤しながら日本文化紹介事業の運営などを行いました。この時に築いたネットワークが今の研究活動にも役立っています。

任期を終えて日本に戻ってからは、国立民族学博物館地域研究企



画交流センター（当時）で、グローバルな課題についての共同研究のオーガナイズなどを担当しました。こうした経験を積むなかで、ウズベキスタンが独立後の国づくりの過程で直面している課題と、ロシア革命後の中央アジアの社会主義的近代化の歴史が重なり、現在の研究スタイルができてきました。

●研究者も生活者であることを大切に

現在は、ウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国のモダニティの形成過程に関心があります。特に近年は、女性がまとうイスラーム・ヴェールを題材にして、中央アジアにおける女性解放運動の歴史、イスラーム復興と女性、現代のジェンダーの問題などについて調べています。その他にも、ロシア帝政期にロシア人によって編纂された『トルキスタン集成』という希少史料のデータベース化に携わってきました。研究の醍醐味は、断片的な情報や事柄をつなげていき、点から線になることで、何かしらの意味が浮かび上がった時のわくわくするような感覚や大きな達成感にあります。また学生に中央アジアについて話し、自分の興味に引き付けて関心をもってもらえた時も嬉しいです。

女性研究者にとって仕事と家庭の両立は大きな課題です。私も『トルキスタン集成』のデータベース化に取り組みはじめた頃に高齢出産と、ほぼ一人での育児を経験することになり、最も育児が大変な時期は、フィールドで飛び回るよりは子どものそばで、と切り替えました。職場の温かい雰囲気や育児経験者のサポートのおかげで、研究活動を続けることができました。現在は当研究所の男女共同参画推進委員会に参加して、小さな子どもをもつ教職員が無理なく働ける環境づくりに努めるとともに、男女共同参画のための広報活動にも取り組んでいます。育児支援も年々拡充されてきているので、研究と家庭の両立は確かにとても大変ですが、大変な分、豊かでもあるので、恐れずチャレンジしてほしいです。「研究者も生活者であることを大切に」というある先輩女性研究者の言葉を私も大事にしたいと思っています。



編集後記

台風の忘れ物

今年は台風の直撃もあり、ついに臨時休園となりました。利用者の皆様にはご迷惑をおかけしました。

通勤途上の道にも台風の忘れ物が。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>